

1979年に東京7年間の国内留学を終えて兵庫県高砂市に転居。周辺の蝶に関しては何も情報がなく、高砂市のすぐとなりの加古川地区で2001年から加古川の里山・ギフチョウ・ネットの会員となってギフチョウの保護活動をする事になると思いはしない。当時、ギフチョウに関しては、京都市左京区鞍馬の道なき林の奥まではいりこんだ 竜王岳山頂部しか経験がない。その場所は、中学時代に文通で付き合っていた小野山充氏が京都大学経済学部へと進んでいて、1年おくれで理学部に入った筆者と初めて生協食堂で会うことができ、そのときに詳しく教えてくれたギフチョウに確実に会える極秘のポイントだ。初めて一人で訪れた1964年4月12日には、鞍馬から静市へと抜ける山越え道のところどころ路傍に咲くツツジの花にもすでにギフチョウが見られ、そのせまい山道を峠手前でブッシュへと踏み込んで道なき林をくぐるようにして山頂近くまで進むと初めて小道があらわれ、杉林にかこまれた平坦な灌木地帯となる。さらに小道をたどれば見晴らしのいい急斜面部に出る。崖部にそって尾根道が右方向にのびているが、どこに至るかはわからない。この尾根筋沿いにツツジの群落があって、初めて訪れた1964年にはギフチョウが次々と求蜜飛来して楽しめた。

そういうわけで、1981年4月、ギフチョウにはすぐ近くの加古川市で会えるとは知らないまま、京都市鞍馬まで家族でドライブをする。

17年ぶりの竜王岳は途中の疎林地帯はさほど変化していないものの、山頂平坦部の杉の木が大きく育って、小道周辺の灌木も茂みを増し、太陽光が届く空間が大幅に減ってはいたが、ギフチョウがちらちらと飛び出してくれ、



子供たちに生きた姿を見せてやれてほっとする。それでも1964年のようなツツジの花に次々と飛来する光景はなく、半日ねばって見られたのは2-3頭だけ。翌1982年4月に再度訪れたときはさらに少なく、もはや高砂からわざわざ訪れる場所ではなくなってしまった。しばらくはギフチョウのことを忘れて、ウツギが多いせいで確実にトラフシジミに出会える加古川市志方町まで自転車を踏み、越冬後のルリタテハやテングチョウ、そして早春のみに活動するコツバメ、ミヤマセセリなどをカメラで追うのが早春の楽しみで、1998年4月10日もトラフシジミの多い山道



へと踏み込む。路面で開翅行動をみせてくれるトラフシジミをビデオカメラに収められ、気をよくして小道を歩くその目の前を小さなアゲハチョウが飛ぶ。いや、どうみてもギフチョウだ。まさか、と思いつきながら走って追いかけネットインするとまぎれもないギフチョウそのもの。これには驚いた。こんなに身近にギフチョウがいるとは思いはしないことで、早速、周辺の林の中に入って食草のヒメカンアオイを探してみると、小さい株ではあるが水の流れが少ない谷筋に点々とみつかると、4月20日過ぎに再び自転車を駆って、10日にギフチョウを採った近くへと向う途上、肩にグリーンネットをなびかせるようについで走るそのネットめがけて、くたびれたギフチョウの♀が飛び込んできてこれまたびっくり。メスがいるくらいだから道路際にカンアオイがあるのでは、とあたりの林斜面を調べると、幅2mほどの群落が見つかる。これまでのいきさつを姫路昆虫同好会の近藤伸一さんに電話連絡すると、何のことはない、加古川の里山・

ギフチョウ・ネットという加古川市職員を含むボランティア団体 <http://www.eonet.ne.jp/~t-takashi/> があって、筆者が発見したと思った場所を含めて食草ヒメカンアオイの分布もかなり調べが進んでおり、毎年、産卵数や幼虫数の調査など、ギフチョウの継続発生支援活動がなされているとのこと。しばらくはこの活動には参加できなかったが、2001年から参加メンバーとなる。

よれよれ状態でネットへと飛び込んできたギフチョウの♀からは、1個だけが採卵でき、冬場の蛹を風呂場の隅に置いてときどきは温かい雰囲気を保ったせいかどうか、1999年3月26日に羽化した個体は、後翅の黒状紋がきょくたんに少なく、黄色部分が広い異常型である。前翅中室は俗に飼育紋といわれる黄色い楕円状模様となっているが、これを果たして「飼育紋」ときめつけていいのかどうか、筆者は疑問に思っている。なぜなら、その後、人工ペアリングなども駆使した50頭以上の飼育を行ったなかで、この紋が頻度高くでる傾向はないからだ。なお、上記写真のような異常型はその後もでていない。



ギフチョウ・ネットの活動中で最もきつのが9月中の残暑厳しいなか、ギフチョウが発生する雑木林に入っての間伐作業だ。イヌツゲやヒサカキという林を暗くしてしまう常緑樹を切り倒し、ヒメカンアオイの繁殖に大きな妨げとなるササ竹類もカマや剪定バサミで刈り取るのだが、特にササ竹は根こそぎ取り去るわけではないので、11月末から12月初旬にもう一度伐採作業をするなどイタチごっこを繰り返している。この大変な作業には、インターネットで楽しいブログを展開されている板野さんご家族全員がはるばる神戸からもかけつけて応援してくれ、メンバーの中に現役高校生の協力を依頼できる貴重なコネをもつ方もいて蕨蚊の攻撃にもめげずに活動してくれて大助かりするなど、保全活動が少しずつ一般の人たちへと輪を広げられているのはありがたいことだ。

「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」の代表世話人である竹内隆さんは、ヒメカンアオイの分布を明らかにするのに多大な貢献をされた竹中さんという強力な助っ人とともに、自然界でのギフチョウ蛹発見を何度も達成され、1999年には世界で初めて羽化の瞬間からのビデオ記録に成功されて「月刊むし」1999年1月号 p.12-13 に発表、さらに2008年4月号にも第2報論文を発表されている。

ギフチョウ♀の羽化が始まる早春の雑木林では、若干早めに羽化した♂が交尾相手の♀を探す探雌飛翔がみられ、通常、♂は林床近くをあちこち縫うように飛ぶのだが、いきなり林内のつたが絡まるコナラの樹肌をなめるように下からまっすぐ上方へと幹にそって飛びあがっていく光景を目にし、あまり見ない行動だと強く印象に残っていた。実は、この♂の特異飛翔は、蛹から出たギフチョウ♀が木立の幹にそって上方へと這い上がって羽を伸ばし、日光がよく当たる場所をみつけてそこでじっくりと飛び立つ準備を始めたという上記第2報に記された事実によって、ギフチョウ♂は、木立樹肌で羽をかためる体勢にある♀を交尾対象として探していたのだと説明でき納得した。いつの日か、あの樹肌にそって上方へと飛ぶギフチョウ♂の飛翔行動をぜひともビデオ映像として記録したいものだ。

